

たてこうどくりつぐれんたい
立坑独立愚連隊

野木英雄



たてこうどくりつぐれんたい
立坑独立愚連隊

野木英雄

ユーク企画出版部

『ヤマや水は、人智や人力をはるかに超えているが、人間がそれらと共存しながら、人間を堂々と主張できるという証明を、精強無比な部下たちが立派に示してくれた。その名も立坑独立愚連隊。ただし、最も人間らしい人間、最も坑夫らしい坑夫の集団であつた』

(本文中より)

△おことわり▽

表題及び文中で、「墜坑」を「立坑」、また「炭鋏」は「炭磁」を用いました
が、筆者が当時の慣習語を尊重したい、とのことから、あえて使用しました。

目次

はじめに

I	おクマ婆さんと喧嘩モグラ	9
II	恐怖の釣り天井	41
III	決死敢闘	85
IV	美女と野獣	137
V	モグラの造反	185
VI	なみだ船	233
	あとがき	301

装幀

原案 那須 真知子
デザイン 相沢 育男

JR常磐線は、茨城県の日立駅を過ぎるころから、太平洋の海岸沿いに北上する。

茫洋と広がる海原が空と接する水平線が、このあたりでは特に印象的だ。実におおらかな曲線美である。それと白砂青松の浜辺も見もので、これより先、旅客は右手車窓にばかり目を奪われてしまう。

左手は山ばかりで、目をやる人は少ない。

だが、この辺から福島県の浜通り南部にかけて、常磐炭田が北に延びている。はるか山系は阿武隈高地に属し、そのふもとに端を発する石炭層が、海側に向かって地中深くもぐりこんでいるのである。

石炭埋蔵量は約十一億トンと推定され、最盛時には大小九十四もの炭坑がひしめきあっていた。そして各駅の引込線には、石炭を満載した無蓋貨車がずらりと並んで、いまやおそしと出番を待っていたものである。

実はこの常磐線は、沿線炭坑主たちの熱望と努力で明治三十年に開通したものである。それを知る乗客もいまは少ないだらう。

茨城県北部は良港にも恵まれ、夜ともなれば各駅周辺は海と炭坑の男がかちあって、喧騒なうえにも血腥い熱気をはらんでいた。

そんな熱気を右と左にかき分けて常磐線は北上し、やがて、「勿来の関」をトンネルでもぐって福島県に入っていく。

トンネルを抜けると、突然、眼下に砂浜が迫り、太平洋が視界一杯に広がる。

ここから海岸線は大きな弧を描きながら遠去かり、列車は磐城の平野をひた走る。

平野の広まりとあいまって石炭層もその両翼を広げ、湯木駅を過ぎるころには、先端の採炭現場は常磐線をかいくぐって地下七百メートルもの深さに達していた。

そして駅ぐるみ町ぐるみ、もはや炭坑一色で、巨大な選炭場や貯木場、あるいは煤けた炭住群が所せましと線路際まで押し寄せ、我物顔に乗客の目をささぎっていた……。

いま、その炭坑は跡かたもない。

炭田の灯は、昭和三十年代、櫛の歯が欠けるように次々と消えていった。

四十年代になると、常陸から磐城まで、常磐沿線の熱気は雲を霞と消えうせた。

棟割り長屋も撤去され、いまはその跡地に白亜の中層住宅がゆったりと並んでいる。

駅前もすっかり区画整理されて、近代的な明るい町並みに変身してしまった。

空も澄みかえって風もさわやか、海と温泉のカラフルな広告塔がひとときわ人目をひく。そして駅舎も町もあでやかに化粧替えて、せせせと旅客に愁波を送っている。

宅地化と都市化の波で沿線の山容は見る影もないが、茫洋たる太平洋は、いまでも旅客の目を慰めて変

わかることがない。

立坑独立愚連隊

I おクマ婆さんと喧嘩モグラ

1

磐城は石城いわきからの転化で、奈良の昔は石城国いわきのかくにと呼ばれていた。これに対して中通りや会津地方は石背いふせ国のくにと呼ばれていた。

石城は石の脇、石背は石の背後だという。

石城国が磐城国、石背国が岩代国いわしろと制定されたのは明治元年で、岩代は石背の読み誤りだったとされている。

炭化植物の石木いむぎが多く出土したことから、石城と呼んだという説もある。

それら石木は、生きている化石といわれているメタセコイアではなかったらうか。

成長が極めて盛んで巨木になるメタセコイアは、日本では第四期中ごろに絶滅してしまったが、常磐炭田の石炭の主要原木であることがよく知られていた。太平洋に注ぐ河川の流域や沼沢地周辺に、広く分布して自生繁茂していたのである。

湯涌ゆわぎ、が語源だという説もある。

常磐炭田のほぼ中央に位置する湯本の温泉は、遠く景行天皇の御代（四世紀前半）に創始されている。

る。往時は佐波古の湯、あるいは岩城ノ湯とも呼ばれ、いまもお豊富な湯量を誇っている。そして後方にそびえる標高583メートルの山の名が「湯の岳」となると、湯涌説もさこそと、うなずけるのである。

当然、湯本に鉱業所を置く常磐炭砒の坑内からは、どこを掘っても豊富な温泉がこんこんと湧いてきた。そのため町の温泉は枯渇してしまっただが、町側は炭砒側に、未来永劫の給湯を約束させている。

炭砒はつぶれたが、温泉は生き残った。

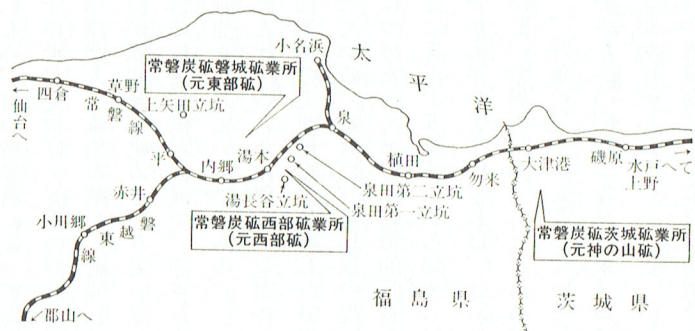
歴史的に名のある温泉はほかにも多いが、企業責任という名の名湯は、恐らく湯本温泉ぐらいなものだからうか……。

常磐炭砒の磐城砒業所は、湯本駅の斜向かい、常磐線と併走する六号国道沿いの高台にあった。春はこの高台一帯の桜が見もので、湯の町湯本には不粋な炭砒のイメージをしばし取り繕っていたのである。

ちなみに常磐炭砒は、隣接内郷町の磐城炭砒（旧浅野財閥系）と、湯本の入山炭砒（旧大倉財閥系）が、昭和十九年に軍の命令によって合併したものである。

両者の鉱区が密着していたのと、出水対策の関連性から合併は当然と見られていたが、戦争末期の石炭不足を人海戦術で補うという軍の意図が明らかだった。

この合併で鉱区は、平、内郷、湯本、小名浜の四市町村（昭和四十一年、勿来市を加えていわき市となる）に跨り、従業員は一万二千人にふくれあがった。さらには茨城県北部の中郷砒と神の山砒を吸



収、たちまち常磐炭田最大の雄にのしあがったのである。

「常磐は固い」と、よく言われていた。

まさにそのとおりで、石橋を叩きに叩き、かつ周辺をじっくり窺ってからでないと、容易に橋も渡らないという堅実さがあった。

特に労務対策が手堅くて抜け目がない。

ストらしいストがないのである。世間や業界は、そんな労使間の堅実性や温健性を含み資産以上に高く評価していたようだ。

しかし、昭和二年までさかのほれば、常磐の労使は血で血を洗うような大激突をしている。いわゆる「磐炭争議」、「入山採炭争議」と呼ばれるものが、結果的にはいずれも会社側が圧勝した。

労働者側は、指導者の資質や戦意が疑われるような内部分裂があいつぎ、ついには闘争資金の拐帯騒ぎなどで自滅している。

なにしろ、町の私娼窟に籠って赤旗を振ったというから何とも縮まらない。応援の社会党代議士・加藤勘十がサジを投げて異例の惨敗宣言をすれば、上部支援団体が首謀者らをキリスト教会に喚問し、無謀な争議突入と乱倫を厳しく糾弾している。

教会が私娼窟を叱るという笑い話のような落ちまでついたが、もともといわき地方は、東北の湘南と呼ばれるほど気候が温暖で、烈々たる階級的闘士が輩出する風土ではない。炭鉱労働者たちも、全国で最も晩生とされていたのである。

それと比べると会社側は、全国各地の労働争議の先例に学んで、用意も周到なら攻撃も凄まじかった。飯場頭や土建屋を主体とした御用組合を尖兵としたほか、わざわざ九州から四十人もの暴力団を呼び寄せている。これに、赤尾敏の建国隊が合流した。さらには県下各地から動員された数百の警官隊も味方につけたのである。組織的行動も意識も未熟な労働者はひとたまりもない。

争議は大正十五年暮れから昭和二年五月まで、約半年も続いた。労働側の支援には、総同盟や評議会の援軍が大挙して来山すれば、はるか秋田や岩手の鉱山労働者たちが陸続として南下してきた。

しかし、常磐の指導者らは折角の援軍を生かし切れず、逆に援軍の顔を逆撫でするような私利私欲に走って、闘争の足並みを乱していたのである。

そのさなかの昭和二年三月末、磐城炭鉱の町田立坑で坑内火災が発生、夫婦三組も含めて百三十四人の坑夫が焼け死んだ。

さらに五月初め、今度は入山炭鉱でガス爆発が起き、三十七名の死傷者が出た。

争議が大混乱に陥ったのは言うまでもない。

周辺の市町村まで巻きこんで、東北戊辰戦争以来の、いわきの天地をひっくり返すような大騒動になったのである。

そして最後は、買収を含む会社側の硬軟からめた猛攻を受け、争議団は支離滅裂状態となってあえなく完敗した……。

この昭和二年の大争議は、その後の労使の結びつきや力関係を方向づけたものとして、常磐炭鉱の歴史には欠かせない。

内なる敵よりも外部の支援勢力に手こずった会社側は、以後、モンロー主義的な「一山一家」を旗印として、より柔軟な労務対策に専念しだした。当然、労務陣営も強化して、九州の暴力団をそのまま居つかせ、労務係として丸抱えしている。

あざとくもがめついが、所詮、炭鉱労務の生まれや育ちはそんなものである。

常磐は固いと言われる所以でもあるが、とりわけ常磐の稼行条件は、九州や北海道の大手炭鉱とは比較にならないほど厳しい。

稼行炭層は厚さ約2・4メートルの一枚だけで、それが12度前後の傾斜で海に向かってどんどん深くなっていく。深度化も早ければ、横方向の展開スピードも早いのである。

すなわち、それだけ運搬や通気、あるいは坑道保守や保安確保が大変で、生産原価も高くつくことになる。さらには、石炭1トン当たり、40トン以上の温泉を汲みあげなければならない。排水費も莫大な

ら、それが生産機能を阻害し、労働条件も悪化させていた。そのほか硫黄分が多い低品位炭で、一般炭としての利用に限定されていたのである。

常磐と比べると北炭夕張などは、高品位の見事な炭層が三枚も重なり合っている。また湧水もなく、ドライな環境で操業できる。それだけでも、彼らの優劣勝敗は歴然だ。

つまり常磐の生き残り条件は実に厳しく、言わば堅実さも常磐の身上、それなくては身が持たなかったのである。

昭和三十年代、石炭産業の斜陽化がいよいよ本格化すると、常磐炭鉱は常磐線を境に海側を東部鉱、山側を西部鉱と分けて、この東西再開発に企業再建の望みを託した。そのため内郷鉱を子会社として切り離して、人も物も機械もこの東西両鉱に集中した。

東部鉱はすでに地表下700メートルラインの深部採掘に入っていたが、西部鉱はまだ500メートルほどで、採算が比較的有利なうえに未開発領域が多かった。従って西部鉱の開発に、より集中的な設備投資が行われていた。

一方、鉱業所前の湯本選炭場を大拡張するとともに、鉱業所のそばから西部鉱の坑底に通ずる大連絡斜坑を開設した。これで東西両鉱の石炭はすべて湯本選炭場に集約され、西部開発にもはずみがついたのである。

ちなみに西部連絡斜坑は常磐線と立体交差しているが、その位置は、湯本駅ホームの北方約200メ

ートル、深度約40メートルの地点である。

2

私は、炭鉱争議が終息した昭和二年五月、磐城は平の呉服屋の次男として生まれた。

外も嵐、家の中も火の車だった。

炭鉱争議の火の粉は浴びなかったが、日本全土を席卷した爆発的な経済恐慌の煽りを受けて、わが家の屋台骨も大揺れに揺れだしたのである。

数年後、店は倒産したばかりか、父は喉頭ガンを患って昭和十一年二月に他界した。

私ら母子三人は路頭に迷い、平の在の父の実家に身を寄せて、祖母の庇護を受けた。

祖母は名を「クマ」と言い、近隣近在でも名うての、男まさりの猛女だった。

東北戊辰戦争直後、曾祖母とともに、会津から馬に揺られて落ちのびてきたという。

野木なる名字はこの地で買いつたものであり、曾祖母は九十歳で世を去るまで、元の姓や育ちを明かさなかったという。彼女も祖母にまさるとも劣らぬ気丈な女性で、私は「大っきい婆っばちゃん」「ちっこい婆っばちゃん」と、二人を呼び分けていた。

祖母は、浜街道を初めて乗合バスが走ったとき、肥桶を積んだ荷馬車を駆って競争を挑んだという。

さしものハイカラバスも、砂利道で往生していたとか。若いころは、馬喰もすれば行商もして金をためこんだらしい。

衆隠居後は、祭りに水戸神楽みづかを中庭で舞わせたり、盆にはじゃんがら念仏踊りの若衆を引き入れ、自らもカッポレ踊りを楽しんでた。また浪曲師を招いては座敷を開放し、近所の人たちに浪花節を聞かせていた。

賭け事が好きで、女だてらに花札賭博にも凝っていたらしい。天分に恵まれたのか、磐城一帯のテキヤの親分が惚れ込むほど、その方面でもめきめき名を売ったそう。村でも指折りの山持ちだったが、なんともばらばらな分散状況から見ると、どうやら博打ばくちのあがり次第で次々と物にしていったようである。勇み肌で、中庭を囲む棟割り長屋の自作には、行き倒れの親子や駆け落ち者をただ同然で住まわせていた。そして地回りにも平気で毒突けば、物貰いの乞食とも縁側で茶飲み話をするような変わり種でもあったのである。

酒豪でもあった。ただ酒乱気味で、怒りだすとあられもなく双肌ふたまたぬぎ、焼き火箸を囲炉裏に突き立てて怒鳴り散らす。そんなとき、そこばかり男のような喉仏のどぼとけが、びくびく激しく震えるのが子供心に怖かった。

南西3キロの高台に、磐城炭砒のズリ山がそびえていた。陽ひはズリ山に沈み、湯の岳おろしの空っ風もズリ山をかけおりにきた。町田立坑の火災事故のときは、連日、死体を焼く何本もの白煙が高台の一角から立ちのぼっては棚引なげひいていたという。

「あっちには、間違っても行くでねえと」
祖母が、嚴重に足止めしていた。

それでもたった一度だけ、私は小学五年生のとき、餓鬼大将となって屑鉄拾いに遠征したことがある。リヤカーには、もっともらしく国防献金ののぼりを押し立てた。そしてトロッコの車軸やレールの切れ端など、金目になる物を手当たり次第に掻き集めたあと、一目散に逃げ帰ってきたのである。

戦利品は、全部、アイスキャンデーや駄菓子などに化けてしまった。ところがほくほくしたのも束の間、屑鉄屋の目鏡オヤジの余計な注進であっさり悪事は露見してしまった。学校では廊下に立たされ、祖母からは「非国民の性根を叩き直してやる」と怒鳴られ、半日も土蔵に押し込められるという仕置きを受けたのである。

以後、炭坑ヤハに足を向けたことはなかった。良きにつけ悪しきにつけ、「おクマ婆っばあおクマババの孫かあ」と言われた悪餓鬼モグだったが、やはり炭坑は鬼門だったのである。

なにしろ坑夫稼業モグは今で言う3K（危険、きつい、汚ない）の最たるもので、およそ常人のなり手はない。また事故の多発や資本の苛酷な労働搾取など、炭坑にまつわる流言や風評ほど陰惨なものはなく、物騒な特殊社会として一般から孤立ないし遊離ユウリしていた。世間の片隅も片隅、場末の苦界クカイのように思われていたのである。

そもそも常磐炭田の本格的な開発は明治中期以降で、主な資本と労働力は外部から導入されたものである。とりわけ労働の質は種々雑多で、奥羽本線や常磐線の開通とともに雪崩込んできた難民的色彩が濃い。北国の寒村からの脱出組が圧倒的多数を占めたが、東京あたりで食い詰めた都落ち組も少なくな

かったのである。また氣候的にも地理的にもこらあたりが住みよいと定着した渡り坑夫もいれば、手頃な隠れ場と紛れこんだ日陰者や凶状持ちも多かっただろう。

本来の住民が胡亂視するのも当然だが、さらに磐城、入山両炭鉱の大家争議が決定的ダメージとなった。思想弾圧や詮議が俄かに厳しくなっていく中で、炭坑は赤の巣窟かとも疎んじて、世間はいいよ遠巻きにして寄りつかなくなったのである。

わたくしや旅のもんだよ七文八文

どうせ九文にやなられない

渡り坑夫たちの、戯れ唄の一節である。

身につまされるが言い得て妙、よそ者扱いの恨み辛みとともに、当時の炭坑の地域社会での位置づけをずばりととらえている。

もちろん私とは無縁な世界で、炭坑との必然的な接点はない。屑鉄拾いは気紛れも気紛れ、たった一度の冒険だったのである。

それが戦後、ずるずると引きずり込まれて常磐炭鉱のモグラになったのだから、人の一生ほど分からないものはない。

あるいは、運命だったのかも知れない。

なにしろ深みにはまる動機となったのが、屑鉄拾いにも似た若気の出来心だった。一時の荒稼ぎにと、またのこのこ出かけていったのである。飛んで火に入る夏の虫、因果応報と言うべきか。

いったんは逃げ帰ったが、あろうことかおクマ婆さんにまた襟首つかまれて、有無を言わず押し込められてしまった。土蔵ではない、炭坑の穴ぐらにである。身から出た錆、運の尽きと言ってもよさそうである。

そもそも、昭和二年生まれほど、有為転変の人生を強いられたものもない。

生まれながらにして、昭和という名の激動の海に投げ込まれたのである。目もあかないうちから沖へと流され、物心ついたらあたりは、「非常時」一色に塗り込められて何も見えなくなっていた。あとはもう暗中模索の人生を、それこそモグラ並みに闇雲に這いずり回らなければならなかったのである。

「第二国民」として忠君愛国の修身教育をみっちり仕込まれた少年期の終わりには、ほんの少しだけだったが、あの、「戦争」にもかかわった。それゆえに、昭和二年生まれに対する毀誉褒貶はさまざまである。

だが、多分に明治や大正時代の血や気質を引いて、いささか骨太、そして大いに苦勞性、貧乏性である。無器用でもあるが、少なくとも、先輩世代の歴史的遺産を食いつぶすようなぐうたらな脛齧りではなかった。

戦後の知識文化人は主体性の無さを笑ったが、稚拙ながら少年期にあれほど深刻に、歴史的時代的同一化の体験を持った世代もあるまい。また、あの戦争、あの大難局に昭和世代も無為無策でなかったと胸を張れるのは、昭和二年生まれに如くはないのではないか。